コラム 4-6　やくざ映画ブームと観察学習

今では想像もできないでしょうが，約半世紀ほど前，日本はやくざ映画ブームに沸いていました。「やくざ映画」というのは，正義の味方的なやくざ(?)の主人公（今は亡き俳優の高倉健などが演じていました）がいて，悪いやくざをやっつけるという，基本的に勧善懲悪型ストーリーで，やくざという反社会的存在を主人公にした映画です。ある種のアウトロー主人公ものの映画ですが，なぜか当時の中学生くらいから老人まで（ファンはほとんど男性ですが）連日映画館に詰めかけていました。

映画を観ることの楽しみの 1 つは，主人公またはその周囲の重要な登場人物の誰か（一般的には観ている人と同性の人物）に同一化することであり，観ている人は，主人公になった気持ちで映画のストーリーに（心理的に）参加しています。同一化が進むと，登場人物と同じ感情状態になったり，さらには体の動きまで無意識のうちに模倣したりした経験がある人もいるのではないでしょうか。

さて，2 時間ほどの映画が終わり，観客が映画館から出てくるところを見ると，多くの人の歩き方がちょっと変わっていたと報道されていました。観客の多くは，主人公に同一化していたために（主人公はやくざなので）ちょっとうつむき加減で，肩を怒らして歩く人がたくさんいたと。なお，この種の行動の変化はそれほど持続しないので，家に帰る頃には普通に戻っていたでしょう。このように，自覚はなくても，ある種のモデリングは日常的に起こっています。自分の好きなタレントの口調や言葉遣いをいつのまにか自分でもしているのも，これと同じモデリングの結果といえるでしょう。